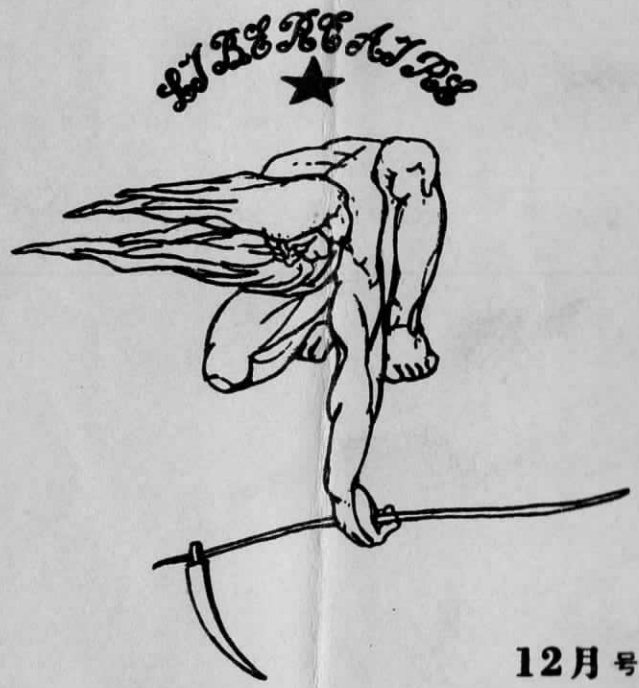
リベルテール



12月号

Le Libertaire VoL, Ⅲ, No 1

無政府主義者の機関誌

昭和四十五年　九月　四日オ三種郵便物認可
昭和四十六年十二月十五日発行オ二十五

定価一〇〇円（送料共）

目　次

町民の水資源を確保させ、八丈島のカナドを破壊させるな　菅　輝生　1
ドストエフスキーをどう読むか　はしもと・よしはる　2
形式論理の不毛性　―向井孝氏への手紙―　笠原　邦樹　6
たそがれ日記　山鹿　泰治　11
奴隷制と奴隷的心性　三浦　精一　12
「全世界無民族協会」（SAT）とE・ランティ　16
野火　18

町民の水資源を確保させ、八丈島のカナドを破壊させるな！

菅　輝　生

水ききん、それは島に住む人びとにとって、もっとも切実にイヤな問題である。伊豆諸島や沖縄諸島のように、台風メッカの離島は概して多雨であるけれども、ことしの沖縄がそうであったように水不足に苦悩しやすいことも事実である。

青ケ島のような離島の中でも最低級の離島では、各戸で雨水を貯水する天水タンクを持っているが、なまじ中途半ばに開発の進んでしまった観光離島は、水道や簡易水道にたよりきっているためかえって慢性的な水不足の状況におかれている。

青ケ島の親島たる観光離島の八丈島なぞも、ごたぶんにもれない。ところで、この八丈島で、いま町民の水源地が町当局と観光業者、そして本土の資本の手によって破壊されそうになっている。これを、北東の風とともに運ばれてきた八丈島の小さな週刊紙によってみてみたい。

八丈島はご存知のとおり、富士箱根伊豆国立公園に指定されているが、この国立公園の一部である八丈・三原山の町有地五〇万坪を町長、町議会が東京のロッテ商事に払下げしようとしているのだ。八丈町民の飲料水を供給するこの水資源地帯にロッテ商事はゴルフ場などを建設しようとしており、町当局は都（八丈支庁）が反対の意向を示しているにもかかわらず、町民の意思を無視してすでに九月六日付で《可能な限度で申請（ロッテ商事の）の主旨に添うべく努力したい》との決定を出しているのだ。

八丈方言で火口原なぞをカナドという。僕は古風な人間だから、古い言い方を許してくれ。カナドとは恐らく神土（かむど）がなまったもので、神の斎ます神聖なる土地を意味する。町当局、ロッテらは、町民の水資源たるこの神聖なるカナドと環境を破壊しようとしている。僕らはこれを火山の神々とともに断じて許してはならない。

（一九七一、十一、一午前一時、雨、ローソクの灯の下で）

ドストエフスキーをどう読むか

はしもと・よしはる

今年はドストエフスキーの生誕一五〇年にあたるとかそこで今夜は私はドストエフスキーをどう読んだか、何を受取ったかを話してみます。ドストエフスキーに対するこれまでの評価を思いだすまゝ言ってみますと…G・ブランデスは「彼はキリスト教徒である」と評しました。シエストフにとってドストエフスキーは虚無から出発する人でした。メレジャコフスキによれば彼は〈狼が来た!〉と叫ぶだけだと言います。ルカーチではバルザックとの差異として彼の作品は内的モノローグに勝れていることでした。オルテガではドストエフスキーはヨーロッパ文学に詳しく、それを自作の方法に活用した作家です。これは作家として、クロポトキンの批評とは逆に名誉な讃辞です。ジードのドストエフスキー論では個人主義の体現者として語られています。ヴエルジアエフでは彼は最もロシア的な作家、民衆主義者、ヒューマニストです。こうして見ると彼を好むタイプは思索的な或は冥想的な人ではないか、つまり自己の人生と民衆、そして社会に就いて考える人びとではないかと思われます。勿論、19世紀小説の特長は、実人生を小説の中で読むことができる点にあります。所謂、自然主義の諸作家の特長は実人生を小説に再現したことでした。しかしその場合彼がフローベルやバルザックと区別されるのは性格描写の強弱だけではないと思う。例えばバルザックだと部屋にいる一人物が語りだすには、その部屋がどんな部屋か、そこに置かれた家具、調度品はどの時代に属し、どんな形態と色彩をもっているかが数頁に亘って叙述されます。それから作品中の人物の経歴、現在の容貌、仕草等事細かに理解させられます。そしてその人物が何を企んでいるか教えられそれがどんな波瀾を呼び、どう終局へ向って行くか付合わねばなりません。フローベルの〈ボーヴァリ夫人〉の場合でも心理描写が詳しくなっていますが、読後において、ボヴァリ夫人が何故自殺しなければならなかったか、彼女の住んでいる村の状況と共に、広くはフランスの一時代までもがほうふつと脳裏に残る次才になるのです。この手だてはドストエフスキーの諸作品でも変りありません。読者はラスコルニコフの貧しい部屋、金貸しばあさんのアパート、ネルバー河のほとり、警部の調べ室、娼婦ソーニヤの部屋等さながら地獄めぐりの

ようにペテルスベルグの街を歩かせられます。しかし前のバルザックやフローベルとの違いは議論とモノローグが多いことです。事物はすべてラスコルニコフの眼を通して読者は見るよう仕組まれています。そこで叙述はつまり自然描写は極端に省かれ、むしろ語られるのです。読者である私は、ラスコルニコフが何を悩み、どんな超人思想をもち、その結果、手段と目的の区別がつかなくなり、外見的には強度のノイローゼ、精神病の状態で、しかもどんなに冷静に金貸しの婆さんとその妹を殺したか知っています。しかもそれは彼に任意出頭を求めた警部も薄々判っているらしくこの二人のやりとりの中に相当のサスペンスがありわくわくする訳です。ドストエフスキー好みの表現だと「口の中がつばで一杯になる」というのです。彼ドストエフスキーが活用した小説のジャンルは何だったか？　私のみたては社会小説、政治小説のジャンルだと思います。またその創作した人物は青年男女が多いこと。勿論フョードルカラマゾーフや隠者、飲んだくれの退役軍人のような年配者も登場しますが概して青年が主役です。これは時代に対する彼の適格な省察を表明するものである。変革期の主役はどこでも青年ですし、彼のように始めから終りまでロシアとロシア人の運命が念頭から離れなかった人にとっては至極当然な成行きです。それでいながら決してロシア一国の作家に終始していないのは何故でしょう。一般に地方作家の描くのは一地方の風俗・世態・人情です。この点ですぐれた作品はゴーゴリのステパンタジンコ村でしょう。これにはウクライナ地方の四季の移り変り、祭の様子、人びとの労働風景が活写されている。しかしその受ける感動は同じ作家の「死せる魂」や「外套」と同じでしょうか後者では生活者の悲哀とか社会制度の矛盾がえぐり出されている。更にドストエフスキーの諸作品では、虐げられる者の悲しみ、生活の不如意も描かれるがその上に何かがある。単に性格描写、事件の経過、人間関係の複雑さを描く他に、彼は神に面接する人間を描いているのです。いうならば、神はあるのか、ないのか？　あるとすれば現状の人間は許されるのか、ないとすれば例えば現に人びとがやろうとしている社会主義革命は正当かどうか。そこに彼のニヒリズムが出現するのです。他の作家、ツルゲーネフにしろチエホフにしろ彼等の描く主人公達は大体に於て善良である。その善良な人びとが何故だかは知らないが社会生活に疲れている。何かをしたい気持、農奴の解放に賛成するとか、積極的にヨーロッパ流の新制度をロシアに活用した新生活を夢想している。だがロシアの現状は彼等の知性や知識とは対蹠的だ。そこで彼

等はアンニュイに陥るとか憂愁になるのです。ドストエフスキーの創造した人物も憂愁ではありますが、決してアンニュイではない。夢想家ではあるが、その為に行動を奪われるようなことはない。行動を失うとキリロフのように死ぬのです。この差異は何によるのか？　私見では彼のニヒリズムに対する接し方がツルゲーネフやチェホフと違っていたところにあると考えます。ドストエフスキーには神があった。その神はキリスト教の神であり、フォイエルバッハの言う人格神ではありません。神・人であり人・神ではなかった。それでいて彼は他の信仰をもてる作家達のように、無信仰者の生活をたゞ俯瞰的にみていた様子はありません。トルストイが〈アンナカレーニナ〉の作中人物レービンを通して、つまりレービンは西欧の哲学書を通して神をみつけようとしていたのですが――その仕方を皮肉にみる程の見神者であり幻視者でした。しかも持病のテンカンによって近親をもったマホメットについてもこれを人・神とみなす風情があります。私はキリスト教に詳しくないので意見を差控えますが私にも判るのは彼ドストエフスキーは19世紀のヨーロッパで発生した社会主義を否定していることです。彼が付した理由は、それらの社会主義に明瞭な未来図がないこと。その社会主義は結局のところカソリシズムのヒエラキー（hierarcy）従うこと、更にヨーロッパは崩壊する運命にあると断じ、これに対しロシアにはキリストの愛が生きて居り、民衆は自己犠牲と受苦に堪え、その愛がヨーロッパを救うと言うのです。彼が最も嫌ったのはロシア人の中の西欧主義者でした。この中にツルゲーネフ（彼とのやりとりは〝悪霊〟中で作家カラミゾフに戯画化されている）ヘルツエン、オガリョフ、バクーニンがいます。同じ民衆主義者である彼と西欧主義者達の間のあつれきは何であったか？それは西欧の理性主義・合理主義に対するドストエフスキーの反感でした。彼は整然と規格化されたもの2×2＝4になるのは反対です。ここに彼の非理性的なもの非合理的なものに対する愛着が表明されている。彼の視点によればフランス語は話せるがロシア文で文法を間違える知識人は揶ゆの対象ですし、ロシア民衆にゆかりのない西欧の社会主義理論の信奉者は大地に根をもたぬニヒリストです。しかもそのニヒリスト達がトロイカを駆って深淵へ向っているのです。これに対し彼の描く理想社会は地上の天国が神の国になるのではなく、神の国が地上の天国になり、そこでは野獣と子羊、鳩と蛇が共存して犯し合わない世界である。少くとも民衆の中の10％のエリートが支配者になり、残り90％が家畜になる世界ではないのです。彼は

どの社会主義理論も支配と被支配の関係が継承されると見抜いていたと思うのです。（〝カラマゾーフの兄弟〟中の大審問官と捕われたキリストの項参照）彼の思想を敷衍すれば、管理社会は合理的世界です。人間は本来非合理的にできているからこれに対し必ず反抗することになるでしょう。彼の作品のエートスは何か？　それはこの非理性的な人間に対する愛着、生への執着ということです。若くしてペトラシエフスキー事件に連座し銃殺刑からシベリア徒刑になり聖書を愛読した彼の信念をラスコルニコフは代弁しています。

「…死を宣告された人は死の一時間前に言ったり考えたりするものだ。もし彼が断崖の上で生きなければならないとしたら、そこはやっと立っていられる程の広さで、足下の海は常闇、永遠の孤独といつまでも続く嵐が取巻くとしても、またもし一平方ヤードの空間に一生の間、一千年の間、永遠に立ち尽していなければならないとしても、それは今、ここで死ぬよりはずっといいのだ」

実際、徒刑以後のドストエフスキーは反革命の立場にいました。しかし彼が反対したのは、人類の未来のための、進歩のための、歴史的必然の、しかし内実は10％のエリートが支配し、残り90％の民衆は家畜同様に使役される革命、パンは十分に与えるがそれは生産をあげるためだけの、人間の自由を否定する管理社会への革命に反対したのだと理解しなければなりません。彼は生涯ナロードニキでした。革命の夢想家であったのです。ロシアとロシア人にとっての最適の革命、ヨーロッパをも崩壊から救済する革命、それは何によって成就するのか？　彼の信じるのによれば、東方のキリスト教にある愛でした。彼の作品を人道主義の立場からだけ評価し、虐げられた民衆の苦悩の同情者とだけみるのは、彼を低く見ることであり、ニヒリズムに則し過ぎて、最後は僧院へ遁込んだとするのは、現実に対する彼の発言を無視する結果になるでしょう。また彼の肉体的な欠陥であったテンカンの発作は、確しかに非合理性の嗜好を養ったにしても、彼の顔はロシアの西欧主義者と同じく、いつもヨーロッパに向いていたのです。シベリア徒刑の経験もこの顔を東方へ向けることはできませんでした。彼はパラドックスこそ自己の生だとみなしていたのでした。　以上

アナーキー　バルカン社刊
No.8　アナキズム文学／シュティルナーとブーバー／ラ・ブウィティ序説／一革命家の告白　定価一五〇円
No.9　大杉とベルグソン／古田大次郎とテロリズム／仏教雑記／アナキズム文学／その他　定価一〇〇円

形式論理の不毛性 ―向井孝氏への手紙―

笠原　邦樹

今日、「自連」の領収書と共に入っていた「イオム通信」を、にがにがしく読みました。特に「H氏の手紙」に現われた向井さんの在り方についてです。

これから書こうとする手紙は、都合上、おそらく向井さん個人に対する疑問みたいにならざるをえないと思いますが、もっと広い願いをこめているのだ、ということを確認した上で、その様な感情が何故僕をとらえたのか明らかにしてみたいと思います。

向井さんは〈あるグループの阻止行動〉を、既に〈内ゲバ検察官の思想〉と規定なさっているようですが、僕には、彼らの主張が明らかにされ、その批判を通じての向井さんの考えが述べられていないので、何とも言いようがありません。

それは、〈厳密な意味での個人が、自己の論理と行為に責任をとって、他の個人（または多数）を批判し、告発し、時にゲバに及ぶ時、むろん彼は《告発者》であっても検察官ではない。〉という向井さんの言葉を確認する時、確かなものとなります。

僕はまず、彼らの阻止行動について、充分に考えるだけの確かな材料を向井さんに要求します。

そして、彼らの阻止行動が、今述べた論理によらず、「検察官の思想――内ゲバの論理」の後半で厳しく糾弾されているようになされるという前提のもとに「H氏への手紙」が書かれていることは、一種の腹立たしささえ覚えます。まだ未来に属するものでしかない〈あるグループ〉と、その〈阻止行動〉が、それらと重なってしまい、他人にそのような固定観念を与えてしまうからです。向井さんは、何をもってそう規定なされたのでしょうか。

もし彼らの阻止行動が起ったとしても、そこには〈一対一の思想〉が貫徹されるかも知れないし、その彼らとは、集団の意志に動かされたのではなく、彼ら内部における〈すぐれて《個》の多様性と異動、その《自由連合》においての主体的自立〉の上に立った討論の結果、〈個人の主体性〉のもとに参加した〈彼ら〉であるかも知れません。これらは、外からただ単に類推していても分かりませんし、不確かなそれをもとにする態度は間違っていきます。

それでは、何故このような混乱が向井さんに生じたのでしょうか　僕は、色々と思いを巡らしてみました。

おそらく、向井さんが「特集・内ゲバ」を書かねばならなかった理由は、自身が言われるように、〈アナキストと称しつつ、検事のように他を裁く行為を、アナキストであるならば傍観できないだろう。〉というところにあったと思います。〈検事のように他を裁く〉という認識を、自分自身のものとしておくこと、又、その範囲での行動は当然としても、今回のような場合、他に公言するのはおかしい、ということは既に指摘しました。そして、公言してしまった、ということにおいて、向井さんを動かしたものは、〈アナキスト・向井〉ではなく、それとは違ったものによって動かされてしまったのです。言葉を変えて言うならば、向井さん自身が、既に、〈麦社〉という党派的な立場に自己を置いてしまっているからであり、〈アナキスト・向井〉として〈あるグループ〉に対峙していない、ということです。そこにおいて向井さんは、自身が否定したはずの〈内ゲバの論理〉に組み込まれているのです。

日本のアナキズム戦線を見渡す時、このような〈思想における内ゲバの論理〉がバッコしていて、その不毛性を僕らはもっと知る必要があると思います。ただそれは、今回のような〈あるグループ〉対〈麦社〉という関係の中に現われてくるというより、むしろ、もっと深く〈個そのものの発想〉として、無意識的なかたちで、視野のせまさや画一的な思考として現われてきています。

僕が先程のように結論するのは、〈麦社は自分であり〉と言われますが、この言葉は、タテマエでしかなく、論理のこじつけのように感じられるからです。

それは、〈加盟しているかぎり〉という言葉に集約されて説明されていますし、それ以上の実感を与える言葉ではないと思います。

〈オレがベ平連だ!!〉と叫んだ高校生がいたそうですが、それは、ベ平連運動を、彼自身の生活とは不可分なものとして斗ってきた彼自身の歴史が、そう叫ばしたのであり、自ら〈熱心な組合員ではない〉とか、〈他人ごとながら〉と簡単に言ってしまう向井さんには、〈麦社は自分であり〉などと、とても言い切ることはできない、と僕は思うのですが……？

向井さんが、〈自連は自分であり〉と言われるならば分かります。

ですから、〈他人ごとながら〉でしかない今回の麦社の行動に対して、〈麦社の向井〉として一つの態度をとりえたということは、そこには、最初に結論した通り、〈向井の論理〉ではない他の何ものかの論理が、向井さ

んを動かした、と僕には思えたのです。〈個〉を〈組織の中の個〉として強調されたのは、何故だったのでしょうか。

何故、そのような但書によって得られる立場が必要なのか、僕にはまったくその理由がみつからない以上、それをお聞きしたいし、僕自身も、そうすることの不毛性や間違いを、僕なりに明らかにしてみる必要にかられ、ペンをとっているわけです。

だいたい僕には、一つのグループを形成しているものが、そのうちのだれであれ、一つの行動を起す時、それについてまったく分かっていない、ということが解せません。このように、内部の緊張関係を欠いた組織とは、中央集権か野合をしか意味しないからです。向井さんは、「検察官の思想――内ゲバの論理」で、〈そのワクに固定し統一してしまう集権（あるいは組織化）〉は、集団の画一化を生むと言われましたが、野合も又同じことです。

今回の講演に関しても、（東京の）麦社の主張に対する主体的な合意があってはじめて、向井さん自身の行動も起るわけですが、そうではないようで、どのような意見をもつにしても、積極性が何ら感じられません。あるのは、〈麦社は出資した社員（組合員）で構成され〉ており、向井さん自身もその社員だからという論理であり講演会との関係には、それ以上の必然性は見られず、ただ〈社員であり〉という義務観念だけで動いてしまっている向井さんがあるだけです。

このことを考える為に、僕は〈麦社は自分であり〉と言われる〈向井〉さんと〈麦社〉の関係に少しこだわってみました。

文面からして、先程も述べました通り、麦社の成立条件は〈出資〉であり、それはおそらく、出版とか運営の為の一つの条件でしかなく、それぞれの思想的な関係を本質としたグループと僕は思っています。このような条件が先行し、それをみたす者によって成立する組織は僕には無縁ですが、それでも固有な目的の為なら成立する可能性は認めたいと思います。でも、その条件のみに自らを置く者は、ただ〈加盟している〉という事実があるだけど、内部における実存的な関係や思想的な関係や思などとは無関係な存在です。

向井さんの立場は、自分自身で確認されている通り、この立場にあると思います。理由は先程説明してあるので繰返しませんが、それは、〈東京中心の運営〉に対し文句をつける立場〉に自分を置いてしまっていることからも納得できます。

しかし、〈麦社は自分であり〉とはそんなものではなく、まさしく、〈自分〉と〈麦社〉はまったく同じ実存的な重みをもつということであり、今述べたような立場や関係からは生まれるはずのないものです。

そうであるにもかかわらず、本来なら越えることのできないギャップが〈麦社〉と〈自分〉の間に横たわっているはずなのに、向井さんはそれを形式論理をもって越えてしまったのです。しかもそれだけではなく、〈自分をまもるのは当然〉と、実は〈自分〉とは無限の距離をもって向い合っている〈組織（麦社）〉を守る為に起ち上がってしまったのです。〈アナキスト・向井〉ではなく、〈麦社の向井〉として、〈内ゲバの論理〉の中で、〈あるグループ〉と対峙してしまったのです。これらの中に僕は、〈組織の論理〉が、〈個〉を飲み込もうとしている瞬間を見出すのです。

〈麦社は自分であり〉という言葉は、組織を、未来の自由を約束する為の手段であったり、それとの関係においてアプローチされるものではなく、自分自身の自由を実現していく関係性を内在した、それ自体が、他に対して自己を顕示する為ではない、固有な独自の存在理由をもっているのだ、ということを吐露しています。何故かというと、革命斗争は、階級間の対立というようなものではなく、〈個と国家〉の関係において斗われる〈私斗〉であり、組織とは、それらの〈個〉の関係に外ならないと思うからです。しかし、それが組織としての自覚をもたざるをえないのは、そこには政治も含め、非常に現実的な問題が関係してくるからで、それは目的やその時々に応じて運動・組織形態として追求されなければならないと思います。

ところが、そのように組織を考えていっても、内ゲバなどに端的に見られるように、組織自体が意志をもってしまうことは明らかで、今のところ、その意志を、今の述べたような〈個の意志〉の結合をもって代えうる確かな方法は、僕には分かりません。ただ確認できることは次のことです。

たとえば、〈前衛〉あるいは逆に〈自由連合〉という〈観念（概念）〉を先行させ、そこから機能的・形態的に組織へアプローチしてはならず、根底に、個の実存と思想をすえ、その関係として追求していかねばならないということです。それを無視して個の立場や思考を、いかなるものであれ、それら以外のものに求めるということは、たとえ本質的なことではないと確認していても、それにふりまわされる結果になるでしょう。

〈あるグループ〉の〈弾劾〉とは、おそらく、加盟し

ているかぎりの社員総体にむけられたのではなく、その上に立った思想的な営為が生み出す傾向やそれぞれの思想に対して向けられたものでしょう。それを受けて向井さんは、麦社全体に対するレッテルと考えておられるようですが、その前に考えなければならないことがあると思うのです。もちろん、レッテルはりや弾劾という行為を良しとするのではありません。

個が個性をもつように、そして、その個性が他人をひきつけるように、組織もやはり、それらの個性がかもし出す〈個性〉をもち、それが他の組織なり個をとらえると思うのです。具体的には、思想であり、理論であり、それを主張する個の人格であり、それらが全体でかもし出すものです。〈人間は、説教されて変わるものではない〉と大宰治が言ったそうですが、指導とか教え込むということを否定するアナキズム運動にとって、自然的に深まっていく関係こそ重要です。

ですがそれには、先程、組織は〈固有な独自の存在理由をもっているのだ〉と言ったような、内部における緊張関係が存在してはじめて可能であるし、僕らの組織や行動とは、それぞれの主張の合意があって成立するものですから、そうあるはずなんです。しかし、現実には、往々にしてタテマエ論でしかないことが多く、麦社のような条件によって生まれる関係では、まあ不可能なことです。ですから、やれ組織論だ、運動論だと出てくるのでしょうが、それはともかく、〈出資〉という条件以上に、向井さん自身が〈麦社〉を自分の中にとらえ込んでいくこと、すなわち、O氏やA氏などとの思想的な緊張関係を創出していくこと、向井さん自身の個性を麦社の個性としていくこと、このはたらきかけが先行してはじめて、〈麦社は自分であり〉と言うことができるのかも知れないし、O氏やA氏の思想や問題点を麦社全体に及ぼすことに対する批判の情熱も、直接に訴える相手に伝わるのではないでしょうか。

自分とは無関係な回路を経て表出される言葉は、決してストレートに相手の魂を震わせることはありません。たとえ相手を納得させたとしても、言語として相手を納得させるにすぎないと思います。

それから、〈東京的なそっけなさ〉とありますが、そのように一般化するのは間違いで、麦社との関係において、その体質的な一つの帰結、すなわち、組織論や運動論、思想の問題として探っていくべきことではないでしょうか。

十一月初旬　長野市より

たそがれ日記

山鹿泰治

第六回メーデー

一九二五年のメーデー準備会で各労組のくじ引きで主催者をきめるのに、自連に当って司会者は機械工の北林カズエ君、副司会者は私が選出された。その朝、芝公園に行って、肩にかける白布の「副司会者」というのをかけると、スパイ共が「山鹿君、今日は一世一代なんだから、自重して黒色を出してくれるな、たのむぞ！」と困ったつらだ。仲間はわれもわれもと演説を申込み、私は呼出し掛りをやった。

一隅でワーッとさわぎが起った。ピカピカ光る短刀をふりまわす反動が一人つまみ出された。

行進は例の通り、アゴひもをかけた「新選組」とかの制服巡査が労働者よりも数が多いくらいで、四人一列ごとに割込んで憎々しいつらがまえだ。行列の左右には自動車に乗った高等スパイがついて進み、指さして注意人物を引き抜く。

御成門から神田の方へ進むのだが、日比谷公園わきまで来ると、スパイが一団になって先頭の者をみな検挙しようとした。私は「やるならやってみろ。このメーデーが暴動になったら、君たちの責任だぞ！」と、どなると彼等がパッと退いた間に通過した。奴等の間には統一がなく、抜けがけの功名争いらしかった。数回そんなことがあって、須田町から上野へ曲った。

山下まで来ると、石段の左の高い木の上から、白布に大きく「才六回メーデー万歳」と大書したのを、パラリと下げたのは労運社。川口慶助君だった。博物館前で解散するまでに同志はほとんど皆引き抜かれた。

これに対して私と近憲（近藤憲二）は警視総監に一寸あいさつをしたくなり、夜に入って丸の内の総監官舎に行って、報知新聞社の前から投石してガラスを破った。続いてその近くの角の三菱銀行に行き、太い花崗岩の柱が並んでいるのに、持参の太いクレヨンで、「金銭全廃」「無政府共産」などと思う存分落書した。翌朝行って見たらガソリンで拭いたらしく、黒々と広がってみごとだった。

タナトス　四号　タナトス社理論誌　三〇〇円
神もなく主人もなく　四号　タナトス社情報紙　三〇円